共犯者

皐月 誘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
共犯者

【Ｎコード】
Ｎ２２７６Ｃ

【作者名】
皐月　誘

【あらすじ】
まだまだ子供。でも本気。あの頃は必死に大人ぶっていたんだって今になって理解することってありますよね？あなたが好きになった人に彼女がいたら…どうしますか？どこまで我慢できますか？この話は彼女のいる男の子に恋しちゃうものです。

プロローグ

私が彼を裏切らない限り、私達は共犯者。
だから唱える【好き】と言う合言葉。

彼が私を裏切らない限り、私達は共犯者。
だから信じる【好き】と言う暗示。

じゃあ…裏切者はどっち？

共犯者

学校から帰ってると、机の上には珍しく私宛のハガキが一枚。
【江本　舞子様】
思わず名前を確認したのは、そのハガキが大学生の私には少し早い結婚式の招待状だったから。
「あっ、一樹と綾ついに結婚するんだ。」
高井一樹。
小学校1年のクラスが一緒だったのが出会いで、中学校も同じだった。
カッコイイわけではないが、スポーツ万能で勉強も常にクラスで一番。そんな彼に私は小学校の1年生から4年間ずっと片想いだった。
藤野綾。小学校の5年生の時に転入してきて、すぐに仲良くなった。
彼女は誰が見ても美少女と呼ばれる部類で、両親ともに教師のせいか勉強も良くできた。
そんな彼女が転入3ヶ月で一樹と付き合い出したと聞いたとき、すでに他に好きな人がいた私は驚きはしたものの、それほどショックはなかった。

ただ…

【やっぱり、舞子とはもう一度会って話したい。ごめん。】

胸が高鳴った。

女の子の字の様にキレイだが、それは間違いなく一樹の字だ。

「なんで一樹が謝るのよ」

そのメッセージは私のウソを、平然を装う私を、見破っていた。

ただ、涙が溢れた。

プロローグ（後書き）

後書きです。
初めまして誘と申します。ここまでお付き合い頂きありがとうございます♪なるべく早く次のお話も書きたいと思ってますので、次回もよろしくお願いします。

1，夢の始まり。悪夢の入口。

どっちが裏切ったかなんて、犯人探し、もう過去の事。
今思えば、全て夢だったのかも。
あの頃の想いも、涙も…全てあなたのウソが見せた夢だったのかも。
私は今も…夢に縛られたまま。

共犯者―夢の始まり。悪夢の入口。

あれは…中学3年生の時だった。
その年、中学に入学して以来初めて、綾と違うクラスになり、一樹とは久しぶりに同じクラスになった。
小学校の頃は仲が良かったと言っても、2年も話していない、親友の彼氏と言うのは微妙に距離を感じる相手だった。学校以外の接点は高校受験の為に通っていた塾なのだが、学年でもトップクラスの成績の一樹と、平均点６０点の私が同じクラスなわけもなかった。
と言うわけで、記憶に残るような会話もせずに秋になった。

学校生活で、秋と言えば文化祭というのは定説だが、やはり私達のきっかけになったのは文化祭だった。
そう、始めはただの会話のきっかけ…だと信じてた。

秋になると暗くなるのが早くなってくる。普段ならこんな時間まで学校に残る事は許されないのだが、文化祭まであと1週間と迫った今、先生から放課後の長時間活動が許されたのは、本当に嬉しかった。
でも、私は1つ大切な事を忘れていた。

同じ方向に帰る友達がいない事。
自慢ではないが、私の地元は田舎で、夜に1人で歩くのは、それはもう怖いものだった。
「どーしよ。暗いし、怖いし、でも準備は残りたいし…。」
私にはこの頃から、焦ると独り言を言うクセがある。
ふと前を見ると…
《あっ、一樹だ。》
確かに彼氏も放課後準備に残っていたが、担当が違ったので見かけたのも一度や二度だ。
声をかけようかと思って…戸惑った。
《何話せばいいんだろ…》

クラスメイトに話しかけるのに戸惑う私は、意気地無しだろうか…？
それとも変な感が働いていたのか…。

「なぁ、江本…。そんなに後ろから睨まれると気まずいんですけど…。」
最初にそう切り出したのは一樹だった。
「ご…ごめん！話しかけようとはおもったんだけど…なんて声かけていいかわからなくて。」
その言葉を聞くと、一樹がフッと鼻で笑った。それが、相変わらずバカだなとでも言われたみたいで、
「1人で寂しいなら、一緒に帰ってあげてもいいよ。」
と強がりを言ってみた。
「相変わらずバカだな。」
「あっ、また言ったな！」
「一回しか言ってないけどな。」
2人の間に笑いが起こる。
これが全ての始まり。

私は手に持ったままのハガキに視線を戻した。
一樹からのメッセージの下にはケータイのアドレスが書かれている。
私は…まだ決めかねている。ただ、昔の友達に会うだけなら、こんなに迷わない。

別に悲劇の悪役になるつもりなんて無いし、ヒロインになんて…なりたくもない。

1，夢の始まり。悪夢の入口。（後書き）

やっと話が始まりました。ここまで読んで下さった皆様ありがとうございます。
よかったら感想なんかを送ってくれると、泣いて喜びます！

2，歓喜の過去。憂鬱な未来。

他人を気にしてたら幸せになりたいって、そんなことはわかってた。
それでも戸惑ったのは自分の中の無意識の道徳。
それでも諦めきれないのは自分の中の無意識の本能。
その頃の私は、まだ幼くて中途半端ということの苦しみを知らない。

共犯者―歓喜の過去。憂鬱な未来。

あれから、毎日一樹と一緒に帰っていた。
久しぶりに話してみると予想外に話題がつきる事もなかった。
罪悪感？無いに決まっている。友達と帰っているだけなのだから。

そんな時、
「ねぇ、高井君と綾ちゃんって別れたらしいよ」
そんな噂を聞いた。
「えー。あの2人が別れたの！？お似合いなのに…。」
「ってか、何年付き合ってたの？」
「えーっと…何年だっけ？舞子。」
ボーっと聞いていた私は、その言葉でハッと我に返った。
そしてその時初めて罪悪感というものを意識した。
「確か…4年目じゃないかな？」
与えられた質問に答えて、また思考を戻す。
いや…私が原因かどうかなんてわからないし…。

「ねぇ、綾と別れたって本当？」
夜7時半。今日も一樹と一緒に帰っていた。

「は？何それ…」
「違うの？噂になってるよ。」
「ふーん。んで、舞子は？何でそんな事聞くの？俺のこと好きにでもなった？」
一樹が少し挑発的に笑って言った。
一緒に帰るようになってから一樹は私の事を昔みたいに
「舞子」と呼ぶ。これも私の罪悪感の原因。
そして、あんな質問をしてしまった理由もきっと罪悪感。
2人が別れた原因が私では無いことをハッキリさせて、この罪悪感から逃れたかったのだ。
「まさか。少し自惚れすぎだよ。」
余裕の笑顔で答えてあげる。
全ては罪悪感を無くす為。
「そっか。それは残念だな。そう言えば、小学生の頃、俺は舞子の事好きだったなぁ。」
正直言うと、胸が高鳴ったと言う表現方法以外は思い浮かばなかった。
突然何を言い出すんだろう？
でも…ここで怯んだら私の負けだ。
「…両思いだよ。私もその頃一樹の事…好きだったんだよ。」
「知ってるよ。舞子はホントにわかりやすいからな。」
反則だ。そんな顔するなんて…私、今絶対に真っ赤だ。
一樹に見られないようにうつ向く私に、彼は続けた。
「それから今もな。舞子…本当に単純だな。俺…綾とは別れてないよ。じゃあ、今日はここで帰るな。」
何が…起こったのだろう…？

今初めまして自覚した。
私は一樹が好きなんだ。
自覚する前にフラれるなんて…。

一樹の背中が涙で滲んでよく見えない。
一樹を好きになったって叶わないのはわかっていた。
わかっていたけど、今の私には認める事しか出来ない。
この涙も、悲しみも全てを含めて恋なのだと。
この痛い気持ちは恋心なのだと。

【久しぶりだね。結婚するなんて…あまりにも早すぎる気がしてビックリした。だって私達まだ大学生だしさ。
あのハガキなんだけど、ごめんって何のことかわからないんだけど。
今更会う必要も無いと思うけど、あのゴメンってやつだけ気になってさ。　江本　舞子】
我ながら強がりだなっと笑いが漏れた。
そして、迷いながらもゆっくり送信のボタンを押した。

諦める事は時間がさせてくれるのだろうか？
あの人が私の中でどのくらい大きくなっているのか…私にはハカるすべもない。

2，歓喜の過去。憂鬱な未来。（後書き）

共犯者の続きでした。
読んで下さってありがとうございます。
まだ終わりではありません。過去も現在もここからが本番なので、
暖かく見守って下さい。
感想やアドバイス大募集です。よろしくお願いします。

3，優しい嘘。残酷な真実。

本音で伝えたい。
でも本音が
「わからない」時、あなたはどこまで私を理解してくれますか？

共犯者―優しい嘘。残酷な真実。

「お疲れ様！！」
あれから一樹とは一言も喋らないまま文化祭が終わった。
「ねぇ、舞子。打ち上げ行く？」
「あぁ、うん。もちろん！」
打ち上げとは言うものの、中学校だからお酒は一切無しのご飯を食べるだけの集まり。
それでも中学校だからこそ、そんなに夜遅くまで遊べる事なんてない。
一樹も来るんだろうなぁ。なんて思ったけど…やっぱり行かないわけには行かない。

あっという間に時間は過ぎた。
結局、一樹とは一言も喋らないまま…。
そのまま終われとも思ったし、このままじゃいけないとも思った。
だから、クラスの男の子が、
「男子は同じ方向に帰る女子を送って行くこと。」
なんて自慢気に言った事を恨めばいいのか、お礼を言えば良いのか
…私は決めかねている。
そう、同じ方向に帰る男の子なんて一樹しかいない。

「江本。帰ろうか？」
あっ、名字で呼んだ…。って言うよりも、一樹はどうやら真面目に送ってくれるつもりらしい。
「大丈夫。１人で帰れるよ。」
「…怪しまれるだろう。ほら、行くぞ。」
そう言った一樹は、なんだか本当に焦っていて、納得してしまった。

「なんか…気まずいんですけど。」
どこかで聞いたのと同じセリフだった。
「別に…かまわないよ。どうせフラれてるしね。」
わざと笑顔で言ってやる。私に許されたのは強がる事だけ。
「…。なぁ舞子。お前、小学校の頃俺のこと好きだったって言ったよな？それっていつまで？俺はずっと好きだった。でも、舞子は本当にわかりやすくて…高学年になってからは、他のやつが好きなんだってわかった。だから、綾が告白してくれた時、付き合う事にした。」
一樹が何を言っているのか…理解出来ない。
少しの無言の時間をあけて、一樹が続けた。
「なんで…なんで今更なんだよ！」
一樹の唇が頬に当たる。
頬だったあたりが、一樹の心遣いなのかと思うとおかしかったが、その時はそんな事を考えてる余裕もなくて…。
ただ、その場に立ち尽くしたんだ。

メールの返事は直ぐに来た。
内容は簡単。
綾との結婚が今流行りの出来ちゃった婚だと言うこと。
謝りたいのは中学時代の事であること。
そんなのは建て前で…ただ会いたいという事。

私も…ただ会いたいと思っている事。

与えられる優しさに、小さな小さなその優しさに、ただ甘える事しか出来ないのは、私が弱すぎたから。

3，優しい嘘。残酷な真実。（後書き）

プロローグも入れて４話目でした。
毎度読んでくれてる皆様、ありがとうございます。
やっと話が少し進みました。
もしよかったら感想や意見をお願いします！

4，幸せな時間。近づくさよなら。

同情されるのが一番辛い。なんて、強がり言ってたけど…
あなたに嫌われる事が、軽蔑されることが一番怖いってバレたら…
あなたはどう思いますか？

共犯者―幸せな時間。近づくさよなら。

【３１】
「舞子…、お前それは悪すぎ。」
一樹が苦笑する。

あのあと、結局一言も喋れない私に
「とにかく…これからも一緒に帰りたい。」
と一樹は言った。
とても幸せな気持ちが心に広がる。
ただ１つ不安な事は、その後の
「でも…俺、綾とは別れるつもりないから。ごめんな。」
と言う一樹の言葉。
私はその不安を必死にで幸せで包み込む。
自分を偽ることって意外と簡単。
ただ幸せでいればいいだけ。

「だって…解けないものは解けないよ。」
【３１】
私の数学のテストの点数。ちなみに１００点満点で…。
「でも３年のこの時期に…。舞子、今日いつもより早く来れる？」

「塾？」
「そう。3学期入ったら無理だけど…冬休みまでなら教えてやる。」
「…行く。んで、一樹は数学何点だったの？」
「…97。」
「さすが一樹。先生が期待するだけはあるね。」
その時、一樹の唇が再び私の頬に当たった。
そのキスはチュッと音でもしそうなもので、私はつい手で頬をこする。
嫌だったわけではなく、ただ恥ずかしかった。

そんな私の行動が気に入らないのか、一樹が頬をこする私の手を取り歩きだした。
こういうのを手を繋ぐと言うのか。
「一樹…。ねぇって！誰かに見られるよ。」
「誰もいないから大丈夫。」
一樹はそのまま私の手を取り歩いて行く。

浮気（浮気）　名詞
―他の異性を（一時的に）愛すること―
今…きっと、こんな感じ。

家に帰ると、荷物の中身だけ入れ換えてすぐに出発した。
一樹と一緒にいる時間が1秒だって惜しかった。
…いつかは終わりがくる関係だから。

「んで…ここがこうなる。分かった？」
塾の教室で机をはさんで向かい合う。
先生達には頼むから一樹の勉強の邪魔をするなと言われたが、私からすれば頼むから2人の邪魔をしないで欲しい。
「あっ…なんだ。そういうこ…」

言葉を失った。
２人以外は誰も居ない教室。
解けた数学の問題。
床に落ちたシャープペンシル。
一樹の唇が私の唇を捕らえた。
「ファーストキスだったんですけど…」
もっとムードとかさ…。
私のそういう文句も分かったのか、一樹はとびきりの笑顔で
「そんなもんやって。」
とだけ言った。
その笑顔…反則だ。
真っ赤な私は、こすりこそしないが手で口を覆って…動けないままだった。
もう、引き返す事は許されないと言われた気がした。

一番お気に入りの服を着て、髪の毛の先まで気を抜かない。
私は今日、一樹に…唯一の共犯者に会いに行く。いつから会ってないだろう？
かっこよく…なってるかな？
私を見て、がっかりするかな？

高校に入ってから、何人かの男の子と付き合い出した。
でも、どの人も一樹ほど夢中になれなかった。
その事を一樹に告げると、やっぱり私を少しバカにしたように笑って、その後優しく口づけてくれた。
私は鏡に向かい、もう一度グロスを塗り直した。

どうすれば、あなたに届きますか？

4，幸せな時間。近づくさよなら。（後書き）

いつも読んで下さる皆様。ありがとうございます。
時間軸が移動しまくりで、難しいかもしれませんが、基本的には中学生時代と現在で進行して行きます！
次回もよろしくお願いします。

5，近い距離。遠い心。

1人ぼっちは寂しいけれど、1人じゃないと信じてた。

共犯者―近い距離。遠い心。

一樹はなくてはならない存在になっていた。
2人で勉強したり、たまに息抜きと言って遊びに行ったり、1度だけ一樹の家に遊びに行ったこともあった。
私と一樹は…本当は付き合ってるんじゃないか…？
2人で居るとそんな勘違いをしてしまう。
そして、廊下を並んで歩く一樹と綾の姿を見るたびに、堕ちていく私がいた。

嫉妬とか…。
罪悪感とか…。
意地とか…。
そういうモノと、好きだという気持ちを天秤に乗せる。
その度に自分がわからなくなる…。

「あれ？一樹、今日は自転車で来てたんだ。」
学校から少し離れた場所で一樹を待っていた私は、単語帳から顔をあげる。
「今日は遅刻しそうだったんだ…後ろ、乗る？」
「いい。私、彼女いる人の自転車の後ろには乗らない主義だから。」
なんでそんな事を言ったのか、自分でもわからない。

もちろんそんな主義を唱えたのは生まれて初めてで、一樹もそんな事お見通しの様子で笑った。
「へぇ。それ、かっこいいなぁ。やっぱり俺、舞子の事好きだ。」
そんな甘く優しい言葉を最近よく聞く。
でも今日の私は、与えられるものだけでは満足出来ないくらい貪欲で、意地悪だった。
「2番目に？」
一樹の顔は見ない。
どんな顔してるかなんて…だいたいわかる。
きっとガッカリした顔だ。
「あ…うん。」
「1番は綾でしょ？」
「そうだけど…どうしたの今日？」
どうしたの？今日はいつもより面倒くさいな。
一樹の言葉を私の頭が自動変換する。
貪欲が許されるのは1番だけで、意地悪が効果を発揮するのは1番であるからこそなんだ…。

笑え。
いつもみたいに…、自分を偽るのは簡単なハズだ。

でも、私は今やっと気付いた。
今の私に必要なのは他人の目を気にせずに好きと言える勇気じゃなくて、ただ潔さなんだ。

「なぁ…何で泣くんだよ。俺が悪かったから、泣き止めよ。な？」
一樹が私を覗き込む。
見てはいけない。
彼の顔を見たら決心が鈍るから…。
「私…もぉムリ。ごめん、距離…おきたい。」

「……。言ってる意味わかってる？」
一樹の声色が変わる。意味なんて１つしかないのに…。
さようならって事。
何も言わずにコクっとうなずく。
涙が邪魔してさようならも言えない。
「そっか…。わかったよ。」
長い沈黙の後、一樹が呟く様に言った。

今ならまだ去って行く一樹を呼び止められるだろうか？
自分と自分が戦ってるって言うのはきっとこういう時の事を言うのだ。
終わった。
全て終わったんだと自分に言い聞かせると、安心感と悲しみが同時に襲って来て、私は声を我慢するのもバカらしくなって久しぶりに声をあげて泣いた。
後悔なんて、山ほどある。
それでも、もう迷わない。

大学生と言うよりはＯＬやサラリーマン向けの喫茶店が待ち合わせ場所。
早く着いて待ってるなんてカッコ悪いと思って、わざと２０分も遅れて行ったのに、片手をあげて
「こっち。」
と教えてくれた彼を見た瞬間に、こんなところまで来ただけで十分カッコ悪い気がした。

絶対って言葉がどれくらいの力を持つのか。
世の中に１００％の事なんて存在するのか。
そんな事、私は知らない。

ただ、それが絶対であることを信じていたいだけ。

5，近い距離。遠い心。（後書き）

前回の話とは正反対の急展開をした第5話でした。
もぉ半分は書けました。あとは折り返すだけですが…まだまだ2人は上ったり落ちたりを繰り返します。
誤字発見などでも気軽に感想送ってくれると嬉しいです。

6，ぬるい罪悪感。冷たい同情。

どうすれば軽るすぎない？
どうすれば重くならない？
あなたにとってのピッタリなんて、私はまだ知らないから…。

共犯者―ぬるい罪悪感。冷たい同情。

えっ…？
昨日泣きすぎたせいで、少し腫れた目を見開いた。
そう、一樹に別れを告げたのはほんの昨日の事だ。
「今、何て言ったの？」
「ちょっと、舞子。真面目に聞いてた？高井君と綾ちゃんが別れたんだって！今度こそ本当だよ。」
別れた…？
一樹と綾が…？
でも…
「なんで？」
「私も詳しくは知らないけど…綾ちゃんからフッたらしいよ。」
友達はそう言って首をすくめる。

綾からフッた…。
心当たりはありすぎるくらいある。
吐き気が私を襲った。

そして、私の予感は的中する。
綾は友達に頼んで私を呼び出した。

綾の友人の表情を見ると…私の考えは間違っていないと確信が深まった。
なぜ、今更なのだろう…。
なぜ、一樹と別れた今でないといけなかったのだろう…。

綾を待ちながら、色々考えていた。
私は吐き気を通り越し、なぜか冷静だった。

綾が怒っていたら…ひたすらに怒りが過ぎるのを待とう。
綾が殴るなら…大人しく殴られよう。
でももし綾が泣いたら…私には何が出来るだろう。

その日の綾の事を私は一生忘れられないと思う。
綾はなんで？と怒り、なんで？と泣いた。
綾が泣くなら…私は悪役になろう。
心置きなく怒れるように。
心置きなく泣けるように。
そんな私の態度に綾は怒りを膨らませ、最後にその手のひらで私の頬を力いっぱい叩いた。
痛いと思うより先に、綾の右手が痛そうだと思った。
これは罪悪感か同情か…どちらにしろ、私は悪役でしかないのだが…。

その日の帰り、私を待っていたのは一樹だった。
今日一番会いたくない人物の登場に私は顔を歪め、けれど断る理由も見つからずに一樹の自転車の後ろにまたがった。

場所なんてどこでもよかった。ただ2人でいれる所であれば。
一樹は…どう思ってるんだろう。
何があっても一樹の1番は綾なんだ。

それはよくわかってる。
あぁ、一樹悲しい思いをさしてしまったんだ…。
「俺…、舞子が悪いなんて思ってないけどさ、今回の事はショックだった。」
その言葉の意味を理解するまでに時間がかかった。
一樹は私が綾に言ったと思っている…？
ショックで目の前が暗くなる。
そして…それでもいいじゃないかと言う気持ちが生まれてくる。
誰が認めなくても、一樹が信じてくれなくても、私は一樹が好き。
人を愛するってこういう気持ち。初めて知った。
「ごめん…。私が絶対に何とかするから！」
「何とかって…？」
自分の事を信じてくれない一樹を好きな自分は馬鹿だと思う。
Ｉ' ｍ　ｃｒａｚｙ　ｆｏｒ　ｙｏｕ.
あなたが大好きですと言う英文は【ｃｒａｚｙ】狂っているという単語を使う。
私はあなたに狂っています…と。
「何とかは何とかだよ。大丈夫。一樹は待っててくれれば良いから。」
まだ１５歳で、世の中の上手な渡り方なんて知らないから…私に出来る事は１つだけ。

「ホットコーヒーを。」
メニューも見ずにウェイトレスに頼む。
普通に…普通に…と言う焦りが私を包み込んで行くのがわかる。
「大学生なのにパパなんて大変だね。」
焦ると人間って言う生き物は少なからず饒舌になるものだ。
「あぁ。卒業するまでは親に頭を下げるしかないさ。まぁ、１０年も付き合った相手だし、親もそんなに文句をつけて来ないよ。こん

なに早く孫に会えるとは思ってなかったみたいだけどな。」
一樹は無駄に目の前のコーヒーをスプーンでかき混ぜながら言う。
あっ、一樹も焦ってるんだ。
そう思うとつい笑ってしまう。
「何笑ってるんだよ。俺さ…今でも時々思うよ。あの時、舞子と付き合っていたらってさ…。」
今の私はどんな表情で一樹の言葉を受け止めているだろう。

私は【あなたを失う】か【周りの人を失う】かの2択だと思ってました。
でも本当は【あなたを失う】か【全てを失う】かの2択だったんですね。
今、私は1人で【全てを失う】決心をしました。
本当は…すごく怖いです。

6，ぬるい罪悪感。冷たい同情。（後書き）

危ないです…。
回想より先に現在が終わってしまいそうです…。
いや…ネタを膨らましますよ。元々ほぼ実話なので、どこまで話を足していいのか検討中なんです。
お気軽に感想や誤字を教えて下さい。
よろしくお願いします。

7，弱虫の笑顔。強がりの涙。

彼のためとか、彼女のためとか…カッコつける為の言い訳はたくさんあったけど…、
これはただの懺悔でしかない。

共犯者―弱虫の笑顔。強がりの涙。

堕ちるのは簡単だった。
どうにかすると言う一樹との約束は私の意地であり、懺悔だった。
頭がいい訳でもない私が思い付いた作戦はとても子供染みたもの。
「聞いた？綾ちゃんと一樹君が別れたのって、舞子が原因って言われてたでしょ？あれって全部嘘らしいよ。」
噂好きの女子達は私を食い物にする。
「えー、何それ？どういう意味？」
でも、それゆえに私の作戦は成り立っている。
「だからぁ、舞子が2人を別れさせようとして、一樹君と一緒に帰ったとか、キスしたとか嘘ついてたんだって！」
それ自体が私の嘘なのだが…。
人間と言うのは、なぜ人の噂がこんなにも好きなのか。
「舞子…最悪じゃん。」
…何とでも言えばいい。最悪なのは事実だ。
「私、あの子って昔から苦手だった。」
…仲良しなんて言葉でくくられた仲は、しょせんこんなもの。
「確かに元々そういう事しそうな子だったじゃん。」
話した事もないのに…よく言うよ。

私が堕ちていく…。

気付けば私は1人になっていた。
自分から望んだものだから、喜ぶべきなのかな？
悲しくない…涙なんか出ない。
楽しくない…笑顔ってどんな顔？
1日1日が長くて気が遠くなる。
焦る事はない。卒業は目前なのだから。
耐えていればいつかは終わるから。
じゃあ…いつかっていつ？
私が欲しいのは、いつかなんて未来の希望じゃなくて、自然と笑えるそんな日常。

「な…何言ってるのよ。」
慌ててコーヒーを口に運ぶ。
「日本が一夫多妻制なら良かったのに。」
一度自分の欲を口にした一樹はもう余裕に溢れている。
「綾が泣くよ。」
わざわざ綾の名前を出すのは自分への予防線。
「綾は…あの時に流した1回だけだけど…、俺、舞子の事何回くらい泣かせたかな？」
気を抜くと涙が溢れそうだった。
底が見えないまま…どこまでも堕ちる。

7，弱虫の笑顔。強がりの涙。（後書き）

短い上に、絡みがまったくありません。
なんか…プロローグ的ですね。
でもこの1話が重要だと思ってます。
ありがとうございました。

8，甘い誘惑。苦い決断。

例えば、その時
「ｙｅｓ」と答えていれば…今の私にはどんな未来が待っていたのか。
どちらを選んでも後悔したであろう…苦しい決断。

共犯者―甘い誘惑。苦い決断。

私がその噂を聞いたのは自分でもビックリするくらいすぐだった。
「綾ちゃんが一樹君に謝ったんだって。私の勘違いだったって言って…。」
「じゃあ、あの2人遂にやり直すんだ。良かった！」
体を包むのは達成感と絶望感。
一瞬の甘い夢の代償は私の生活そのものだった。

これで全て終わった。
達成感ばかりを意識するようにする。
これで一樹や綾の事で悩む事は無くなるんだ。
私の懺悔は報われたんだ。
そんな事ばかりを考えて歩く帰り道、私はふっと上げた視線の先に彼を見つけた。
一瞬、幻だと思った…。
ここしばらくの間、彼を視界に入れないように意識し続けて…ただ一人よがりに想い続けた相手。
「今回の事…何て謝ったらいいか、全然わからなくて…。」

一歩先を歩きながら一樹が言った。
「なんで謝るの？私が悪かったんだよ。」
強がる声が涙に震える。
「違う。舞子じゃないんだ…俺が全部悪いんだよ。今日、綾が謝って来たよ…やり直そうって。」
目の前が暗くなる。
わかってた事なのに…。
そんな私の様子を知ってか知らずか、一樹は続ける。
「俺…ずっと考えてたんだ。舞子がどんな方法で綾を納得させたかも…ずっと見てた。迷う事なんて何も無かったのに、答え見つけるのにこんなに時間かかって…本当にごめん。俺達、今から初められないか？俺、やっぱり舞子がいいんだ。」
甘い感覚が体を包む。
夢を見てるのカモしれない。
涙が溢れて止まらない。

「ごめ…やっぱり…無理だよ。」
なんで、そんな答えに辿り着いたのか詳しくは覚えていない。
ただ再び迫ってくる罪悪感。綾の事。一樹の為。
そして何よりも…私と付き合った一樹が浮気をしないか…一樹を信じられない自分がいる。
「…そっか。そうだよな。」
「そう…だよ。せっかく苦労して綾とやり直せるようにしたのに。次は浮気するなよ。」
笑顔を作る。
長いことしていないし、涙が溢れてるし、どんな顔か自分では分からないけど、しっかりと笑顔で言う。

これが私の決断。
弱虫な…強がりな私の精一杯の決断。

「あの時、舞子がなんて言っても、俺がしっかり舞子だけを思っていれば良かったんだ。なんでいつも後になって後悔するんだろうな。」

「やめてよ。マリッジブルーとか言うつもり？なら、勝手に一人でやって。私…不倫までする程一樹の事思えないから。」

嘘…と言うより、そんなの自分でもわからなかった。

「不倫なんてさせるつもりない。ただもう一度舞子に会いたいって…思ったんだ。これ以上後悔しないように。」

あの時の決断…私はいまも後悔してますか？

8，甘い誘惑。苦い決断。（後書き）

あと2話くらいで終わると思います。
更新ペースが非常にのんびりで申し訳ないです！

9，嘘つきな私。正直なあなた。（前書き）

更新が遅くなってすいません。
今回で回想編は終了です。
舞台は卒業式！
最後まで読んで行って下さい。

9，嘘つきな私。正直なあなた。

例えばあの頃に戻れるなら…
私達は今度こそ後悔したい道を選べますか？
愛を貫き通せるのか？
それとも…
道徳を守り抜けるのか？
私はまだ中途半端なまま…。

9，嘘つきな私。正直なあなた。

3月14日―卒業式―
楽しかった事。辛かった事。
笑った事。泣いた事。
恋をして…失恋した事。
いっぱい詰まった3年間。

あれから、一樹と綾は学年公認カップルに戻り、
私は…元通りとは行かなくても、たくさんの友達が戻ってきた。
私と一樹は挨拶する程度で…それだけで充分だった。
ただの片想いで、ただの失恋。
別に今回が初めてなわけじゃない。

「舞子…。」
誰もいない教室で、窓から校庭で別れを惜しむ友達達を眺めていた。
「一樹…何してるの？」
嘘。本当は一樹は来てくれるって信じなてた。
「舞子の事…探してた。」
本当に私はズルい。

一樹のそんな言葉がとても嬉しい。

「綾とは高校一緒なんだよね。2人とも頭いいなんて羨ましいよ。」

「あぁ…。」

「で…何しに来たの？」

本当にズルい。

知ってるくせに…。

待ってたのに…。

「今日、ホワイトディだろ？俺…舞子からチョコ貰ったから。」

「あんなの義理なのに…。わざわざ律義だね。」

つい笑ってしまう。

「でも、俺が何かしたいんだ。何が欲しい？」

一樹。

心の中でそう即答する。

諦めが悪すぎて、つい笑ってしまう。

「第2ボタン。」

笑顔で答える。

本当は大きな賭けのつもり。

少し…震えている。

「ごめん…これは…」

「知ってるよ。綾にあげるんでしょ？」

笑顔で答える。

目の前は真っ暗。

頬には…伝う涙。

今、一樹の目に私はどういうふうに写っているのかな？

突然、唇にあたたかいものが触れた。

「ごめんな。」

キス…された。

遅れて気づく。
一樹はそれだけ言って、教室から出て行った。
取り残された私は…共犯者に裏切られたような惨めな気分で、誰も居ない教室で一人泣いた。
今日で全て終わったんだって…泣いていたんだ。

それが私達の過去の全てだ。
「あの時…卒業式の時、舞子は第2ボタンが欲しいって言っただろ。」
私が何も喋れないでいると、一樹は続けた。
「あの時…正直言うと怖かったんだ。それまでも何回も舞子を泣かせて来たのに、これから俺に守れるのかって。でも今なら…ハッキリ言える。もう舞子を悲しませたり…泣かせたりしない。俺が舞子の事守りたい。」
「何言ってるか、わかってるの？勝手な事言わないで！」
「わがまま言ってるのはわかってるんだ…。これ、第2ボタンの代わりのつもりで用意してきたんだ。」
そう言って、一樹は鞄から小さな箱を取り出した。
聞かなくてもそれが何か、すぐにわかる。
指輪だ…。
私は…何を選べばいいんだろう…？

9，嘘つきな私。正直なあなた。（後書き）

読んで頂いて、ありがとうございます。
次回が最終回の予定です！！
ただ…私自身、何を選んで終わりにしたらいいのか悩んでいます。
舞子はどうするべきなのか、アドバイスやご意見ご感想をお待ちしています！ありがとうございました。

１０，幸せな花嫁。不幸な…。（前書き）

共犯者もついに最終回です。
ついにと言っても更新が遅いだけで、たったの１０話ですけど（笑）
とにかく…読んで下さい。

１０，幸せな花嫁。不幸な…。

それが私の答え。
共犯者であるあなたに対する精一杯の応え。

１０，幸せな花嫁。不幸な…。

「受け取ってくれないか？」
一樹は真剣な顔で言った。
差し出されたのは小ぶりなダイヤのついたシンプルな指輪。
「冗談言わないで…。」
わけがわからない。
だって一樹は綾と結婚するんだと言ったではないか？
１番は綾だと言ったではないか？
「冗談じゃない！舞子が言いたい事はわかるよ。今ここで綾の事見捨てるのは…社会的に見て最悪だ。でも、許して貰えるならどんな事をしてでも償う。そして…舞子と一緒にいたい。」
そんなの…
「そんなのおかしいよ！一樹が言ったんだよ？綾が１番だって…。」
先に裏切ったのは一樹でしょ？
もう…信じられないよ。
「俺は…舞子と一緒にいたいって、あの時…綾とやり直す前に言っただろ？結局最初から最後まで…欲しいのは舞子だけなんだ。」
言った…。確かに昔、一樹は私に付き合おうと言った。
断ったのは私だ。先に裏切ったのは…私だ。
「でも…。」
言葉が繋がらない。
だって、一樹の気持ちが嬉しくて。
ずっと想っててくれた気持ちが嬉しくてたまらない。

「あの時…舞子は周りを敵にしてまで俺を守ってくれただろ？今度は俺が守る。約束する。何があっても俺が舞子を守るから、ただ傍にいてくれ。この指輪…受け取ってくれないか？」
一樹が指輪をケースから取りだして、反対の手で私の左手を持ち上げた…。
私は…幸せになれるのかな？

「「おめでとう」」
「「おめでとう」」
あちらこちらから聞こえてくる祝福の声。
こういうのを…幸せって言うのかな？
好きな人と一生一緒にいるって決める事。
それをみんなが祝ってくれる事。
そっか…これが幸せなんだ。
空を舞う花びら。
ふと…チャペルを振り返る。
白のドレスはキラキラしていて…
「舞子…？」
ふと、我に帰ると目の前にはウェディングドレスに身を包んだ綾がいた。
「綾…おめでとう。」
そう。今日は一樹と綾の結婚式だ。
「ありがとう。舞子が来てくれるなんて驚いた！中学の卒業以来だよね？」
笑顔の綾。幸せな綾。
中学時代の事など忘れたのか…。
それとも、これが結婚した女の余裕と言う事なのか…。
ちらりと見える結婚指輪は先ほどチャペルで交換したばかりの指輪

だ。
「幸せになってね？」
最後の強がり。
幸せになってね？
指輪も、ドレスも、みんなからの祝福も…幸せになりたいと思う勇気さえ私は持っていないから…だから、私の分も幸せになってね？

「指輪は…貰えない。」
私は一樹の手から自分の左手をどけた。
「それは…どういう意味？」
「ごめんなさい。一樹の傍にはいれない。私は…ずっと一樹に裏切られたと思ってた。でも本当は…私が一樹を信じなかっただけ。一樹は何も悪くないよ？全部私のワガママなのに付き合わすわけにはいかない。」
「違う。舞子のワガママなんかじゃない…全部俺の…」
「それが…無理なの。私は一樹を裏切ったと後悔し続けて、一樹は私を傷付けたと後悔し続ける。私は…一樹とじゃ幸せになれない。」
それが本当に最後の私達の会話。
一樹は一言も喋らずに店を出て行ったんだ。

私が彼を裏切らない限り…。彼が私を裏切らない限り…私達は共犯者。
だからあり得た『好き』と言う関係。
じゃあ、それを壊したのはどっち？
信じなかったのは…？
逃げ出したのは…？
裏切り者はどっち？

１０，幸せな花嫁。不幸な…。（後書き）

終わってしまいました。
この話は私自身が体験した恋を元に小説を書いたものです。
終わり方が…ってのもあると思いますが、やっぱりこの小説はハッピーエンドじゃ書けないです。ご理解いただけると嬉しいです。
最後になりましたが、ここまでお付き合い頂きありがとうございます！感想なども大募集中なので、お願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2276c/

共犯者

2010年12月9日06時22分発行